

ゼミナールにおける Facebook の活用実践

Practice using Facebook in a Seminar

加藤 智也 *Tomoya Kato*

(人間発達学部教養部会)

1. はじめに

ソーシャルメディアが情報発信やコミュニケーションの社会インフラとして機能しはじめた知識基盤社会においては、テクノロジーを活用しながら他者と協働的に学ぶことを可能とする新しいスキルが求められている。近年では、ソーシャルラーニングという SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) 等を活用して参加者同士がインターネットを通じてインタラクティブに教え合い学び合う学習形態が期待されており、授業時間外での学習時間の増加が学習者の主体的・能動的な態度を養うとしている。

SNS の中でも実名制を採用し今では全世界約 12 億 8000 万人のユーザーを抱え我々の生活やビジネスに深く浸透している Facebook は、大学での導入も進みつつあり、その利用目的については、卒業生や入学志望者との関係構築やブランドイメージの向上といった広報媒体としての利用のほか、就職活動などでの活用も進んでいる。

本研究では日本ではまだ広く普及していない 2010 年より Facebook を教育、なかでも少人数でのゼミナールにおいていち早く検討・導入してきたことから、その実践について他のツールと比較しながら考察する。Facebook をゼミナールに取り入れることにより、情報の共有を効率化し、学生の学習意欲を向上させ、さらにはゼミナール内での人間関係を構築するのに役立つものと考えられる。

第 2 章では、学生のソーシャルメディアの現状についてアンケートの結果をもとに明らかにする。第 3 章では、Facebook 導入以前のゼミナールにおける情報共有・コミュニケーションの問題点について言及し、第 4 章でゼミナールでの Facebook 活用について検討する。第 5 章では、Facebook の運用方針を明確化しゼミナールでの実践について報告する。そして、第 6 章で学生からの評価をまとめ、第 7 章で実践結果について考察する。

2. 学生のソーシャルメディア利用の現状

ソーシャルメディア全盛の時代において、通話やメールに代わって SNS がコミュニケーションの主流となり、インターネットでの滞在時間も他のサービスと比較して圧倒的に長くなっている。その背景として、国内で 5734 万台と普及したスマートフォンの存在があり、スマートフォンは SNS と親和性が非常に高く、スマートフォン上で SNS を利用すれば時間や場所にとらわれず情報のやりとりが可能となるため、非常に利便性が高くなる (2014 年

3 月末時点、MM 総研推計)。

2012 年から 2014 年に本学の学生に対して行った利用調査 (有効回答数は 2012 年 : 72 名、2013 年 : 91 名、2014 年 : 86 名) では、SNS の利用状況は以下のようになっている (図 1)。

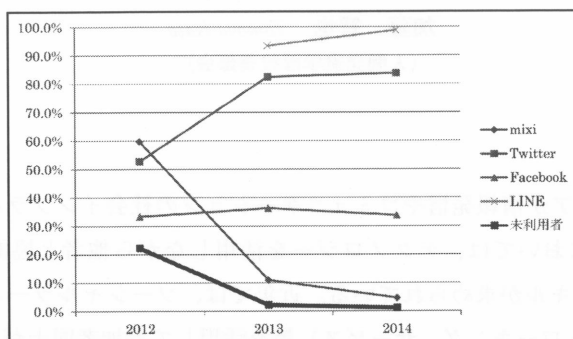


図 1 学生の SNS 利用状況

SNS の利用率はほぼ 100% であり学生の生活には欠かせないものとなっている。また、この 3 年間の変化として、LINE の急伸・定着、mixi の激減が目立ち、Facebook はやや減少傾向、Twitter は安定して高い人気を保っている。

3. ゼミナールにおける情報共有・コミュニケーション

本ゼミナールは 2004 年度より担当しているが、当初は授業を補完するものとしてメール、メーリングリスト、ホームページを活用してきた。メールは個別の連絡・指導・質問受付に利用し、メーリングリストはゼミ学生全員への一斉連絡・指導およびゼミナールで発表する前に発表概要をゼミ学生で共有することに利用した。さらに、ホームページには学生が発表する資料を PDF として蓄積し、後から他の学生が振り返りレポートを作成するのに活用した。そして時代の流れとともに、ブログやソーシャルブックマーク、Twitter、Foursquare などのソーシャルメディアを日本で普及する以前より積極的にゼミナールに採用してきた。これらの IT ツールを駆使することにより、授業時間外に指導・学習・連絡ができるため、週に一度開催されるゼミナールの時間を有効に活用することができた。

しかし、IT ツールが複数に跨ることにより一元的な管理が難しく、教員にとっても学生にとっても使い勝手の面ではよいとはいえなかった。また、教員が学生へ連絡した場合、必ず読んだ旨を返信するよう指示してはいたが、それを怠る学生もいてスムーズな連絡手段ではなかった。また、学生が自由に情報を発信してメンバー全員で共有がしづらかったため、自発的な学習や意欲といった面においては効果に疑問があった。そして、教員と学生のコミュニケーションはある程度促進されるが、学生同士のコミュニケーションへの発展は難しかった。

4. ゼミナールへの Facebook の採用

Facebook は全世界で約 12 億 8000 万人が利用する世界最大の SNS であり、日本でも 2100 万人が利用している (2013 年末、日本法人社長講演資料)。本ゼミナールでは Facebook の実名制のリアルなつながりを前提とした信頼性およびグループ機能やメッセージ機能に着目し、日本では mixi 全盛でありまだまだマイナーな存在であった 2010 年に Facebook を採用し今日に至っている。

Facebook のグループ機能は、クローズドな掲示板形式の環境で情報共有・コミュニケーションするだけのシンプルなサービスである。特に、グループに参加しているメンバーの投稿やコメントがあった場合の他のメンバーへの更新通知機能がとても優れており、更新情報が伝わりやすいため、学生同士のコミュニケーション・ディスカッションが促進されることを期待した。そして、開封済機能があり、メンバーの誰が読んだのかがリアルタイムに把握でき、メールと違って確実性があり情報伝達洩れを防げると考えた。この他、アンケートを取る機能やイベント作成機能、文書や動画画像など共有するファイルをアップロードする機能もある。また、グループ機能はゼミ学生のほとんどが所有するスマートフォンの Facebook アプリにも対応しており、非常に利便性が高いと考えた。

Facebook のメッセージ機能は、特定の個人に直接連絡を取りたい場合に利用でき、内容を見られるのはメッセージを送った人だけなので、メールの代わりに利用できる (複数人にメッセージを送ることも可能)。メールと違いアドレスの管理が不要であり、また開封確認ができるため、情報管理および情報伝達において非常に有益であると考えた。また、messenger という Facebook からメッセージ機能のみを取り出した優れたアプリがあるため、その利便性も期待した。

さらには、学生はソーシャルメディアについて偏った知識・経験しかもっていないため、Facebook という新しいサービスを通じて、ソーシャルメディア・リテラシーの向上につなげたいとの思いもあった。

5. Facebook の運用方針の明確化と事前指導

ゼミナール内で利用する主な機能はグループとメッセージである。グループはゼミナール学生全員で共有すべき内容、メッセージは学生個人のみに関わる内容について利用した。

Facebook のグループには、すべての Facebook ユーザーが参加できる「公開」、グループの存在は公開されているがメンバーにならないと内容を閲覧できない「非公開」、グループの存在すら公開しない「秘密」といった 3 つのタイプがあるが、ゼミナールではメンバーが限定されており、ゼミナール学生以外が存在を知って参加を希望されても困るため「秘密」のグループとした。

教員からグループ向けに投稿する内容としては、主に次回ゼミナールまでにすべき課題に対する指示、ゼミナール内で説明に利用したスライド、今後のゼミナール予定、学生の

成果物に対する評価・コメント（ゼミナール全体に有益なもの）、研究に役立つ情報、激励メッセージ、学科や事務などからの学生全体に向けての連絡である。たとえゼミナールを欠席しても、また出席をしていて話を聞いていなかったとしても、問題のないようにあらゆる情報を発信する。学生がグループ投稿を確認したら必ず速やかに了解を意味する「いいね！」を押すもしくはコメントをして読んだことを教員に知らせることを義務づけ、習慣として根付くまでは少々強引ではあるが、反応がない場合は減点のペナルティを科すこととした。

学生からも自由にグループへ投稿することを許可し、ゼミナール内での議論を活発かつ有効なものにするためゼミナールでの発表前に概要の説明をグループへ公開したり、研究の過程で各自の成果物に対する他のメンバーから評価・感想をコメント機能を通じて得たり、学生主体でゼミナール全体の企画をたてたりするなど、積極的な活用を促すこととした。

教員から学生への個別メッセージはなるべく最小限とし、やむを得ない急ぎの場合のみ活用し、基本的には学生からの連絡に対するレスポンスに活用した。学生が教員にメッセージを活用するケースとしては、ゼミナールの欠席連絡（欠席する場合は事前連絡および理由の説明の義務化）、簡単な質問・相談、対面で相談する必要がある場合の日時調整などがある。学生はリアルタイムなレスポンスを期待するため、教員がメッセージをする時間帯を周知した。

各年度のゼミナール開始時の学生の Facebook アカウントの所有状況は以下のとおりである。

2010 年度	18 人中 2 人
2011 年度	14 人中 1 人
2012 年度	12 人中 2 人

運用を開始するにあたり、まずは教員から Facebook について特徴やリスクの説明を学生に行い、ゼミナールでの必要性および活用方針について周知した。その後、パソコンから一斉にアカウント登録をさせ、さらにスマートフォンアプリを導入させた（初年度のみ教員が行い、以後は上級生が下級生に指導）。登録内容については実名とプロフィール写真（顔写真以外でも可）のみを義務付けて、その他の項目は各自利用しながら登録を判断するよう指示した。ゼミ学生同士での友達申請は任意にしたが、自然と全員でつながる流れとなった。また、ゼミナールのグループを象徴するバナーを作成したい学生を募り、いくつかの案より学生に決めさせた。そして教員を検索・友達申請をさせ、教員があらかじめ作成した秘密のグループへ招待し運用を開始した。

6. Facebook 活用の評価

ゼミナールで3年間運用し、利用した学生 44 名を対象にアンケート評価を実施した。主な項目のみ結果を記載する。

○ゼミナールにおいて Facebook が情報共有に役に立ったか？

役に立った：44 やや役に立った：0
 あまり役に立たなかった：0 役に立たなかった：0

○ Facebook を利用することにより学習意欲が向上したか？

向上した：34 やや向上した：8
 あまり向上しなかった：2 向上しなかった：0

○ Facebook が人間関係を構築するのに役に立ったか？

役に立った：34 やや役に立った：7
 あまり役に立たなかった：3 役に立たなかった：0

7. ゼミナールにおける Facebook 活用実践に関する考察

ゼミナールにおいて Facebook を活用してきたことから、アンケート結果や学生からのコメント、教員の手応えをふまえ、「情報共有」「学習意欲」「関係構築」の3つの観点より考察をおこなう。

○効率的な情報共有

ゼミナールに関する情報はなんでも Facebook で一元管理されているため、スマートフォンさえあればいつでもどこでも確認ができるため、非常に学生からも評判がよかった。他のゼミナールでは紙で配布することが多く、紙の所持状況によっては確認に時間がかかり紛失の危険もあるため、デジタル情報の強みを生かすことができ、ペーパーレスにもつながった。Facebook の情報はストックされるため、Twitter などのフロー型サービスと比較し情報の一覧性・検索性に優れ、またメールと比較しても学生ごとにメッセージが自動で仕分けされるため管理も容易である。そして、メールアドレスの管理をする必要がない。学生は頻繁にメールアドレスを変えることがあり、その都度教員がアドレス情報を更新する必要があり非常に煩わしかった。さらに、ホームページと比較しても更新の容易性、確実な更新通知、了解確認など優れた面が多かった。

特に学生が教員の投稿に対して読んだか、そして了解したのかという点においては大いに役に立った。ある学生が情報を知らなかったために不利益を被ったと強く抗議してきたことがあったが、記録はすべて Facebook グループ内に残っており、教員の投稿日時を提示し、その学生が表示し「いいね！」を押した証拠を示すことで学生は自分のミスを認めた。こうした言った言わないの証拠になるという点においても、非常に有効なツールである。なお、学生に深く浸透している LINE であるが、スマートフォンに最適化されているため、スマートフォンのみの連絡であれば十分であるが、パソコン版のラインでは使い勝手が悪

く情報の蓄積性・一覧性において機能不足であり、パソコンで作成した資料をパソコンから共有・蓄積するといった運用が厳しい。

○学習意欲の向上

ゼミナールで発表する学生は自分の発表の 1 週間前までに Facebook グループに発表テーマおよび概要を公表し、発表者以外の学生はそのテーマについて予習しておく。そうすることにより、ゼミナールでのディスカッションが活発化し、予習でわからなかった点などを全員で補足しながら理解を深めていくことができた。そして最後に発表者は使用したスライドをグループに公開し、教員および発表者以外の学生はコメントを記入することにより、発表者は達成感を得たり反省をすることになり、また発表者以外の学生は自分の考えを整理する機会となった。グループ上に記録として残るため安易な発言は見られず、また学年の垣根を越えることで適度な緊張感が生まれ、責任をもって取り組む姿勢もみられた。そういったルーティンを確立することにより、学生が自ら考えて能動的に取り組み、さらにゼミナールに対して強い参加意識をもつようになった。

教員も学生が困るタイミングを見計らい、適宜アドバイスや指示を与えた。また、学生からも質問をメッセージで受け付けることにより、やる気になっている学生を迅速にフォローできた。その結果、ゼミナールでの対面の授業を補完するものとして有効に機能し、また研究のプロセスを全体で可視化することにより生産性の高い指導ができたと考えられる。

○ゼミ生同士のリアルな関係構築

Facebook グループでの活発なやりとりは、Facebook のみの関係を超えてリアルなコミュニケーションへと発展した。同級生同士では Facebook 導入前において見受けられたほぼ限られた友達のみとのコミュニケーションが改善され、個々の研究についてもゼミ生全体のこととして興味・関心をもってお互いに助け合いみんなで解決していこうという姿勢がみられた。また、上級生は下級生への見本となるという意識も芽生え、縦のつながりが強化され卒業後もコミュニケーションが続いている。閉じた空間でのグループのため安心感をもってやりとりでき、ゼミナール時間外で親交を深めるといったリアルな人間関係構築に役立ったといえる。しかし、最初はなかなか投稿やコメントをしづらいため、ある程度教員が強制力をもって誘導することが必要と考えられる。

8. おわりに

ゼミナールにおいて Facebook の活用を実践してきた結果、メンバーに好意的に受け取られ、無料で手軽に活用でき使い勝手も良く、特にグループ機能やメッセージ機能において、情報共有の効率化や学習意欲の向上、メンバー内でのコミュニケーションの促進にその有

効性を確認することができた。

しかし、気軽に教員とメッセージが取れるため、運用当初は安易な欠席連絡があったり、友達感覚で教員に接して来る学生もいたりした。またその一方で、Facebook の中で教員が学生のプライベートにも接することもあり、学生の方が教員の接触を敬遠することもある。企業ではソーシャルハラスメントが問題となっており、正当な業務による指導の範囲を大きく逸脱するなどあまりに悪質な場合はパワーハラスメントやコンプライアンス違反になり、またネット上に記録が残るため口頭でのやりとりよりも証拠に残りやすく導入には細心の注意が必要となっている。大学でも同様のことがいえ、プライベートと教育を混同せずどう使うか明確なルール作りをして学生に周知した上で、学生と一定の距離を保ちつつ必要以上に慣れ合わないようにして、リアルでのコミュニケーション以上にそのリスクに注意を払う必要がある。

また、今回は主にグループ機能とメッセージ機能という限定的な利用であり、教員も学生の利用具合を確認していたため、外部とのトラブルなどはなかった。しかし、Facebook ではさまざまなことが可能であり、今後利用範囲を拡大していったときに実名ならではの問題も生じる可能性があるため、他のソーシャルメディアも含めてうまく活用するためのソーシャルメディア・リテラシーの向上についても検討する必要がある。

【参考文献】

- [1] トニー・ビンガム他、『「ソーシャルラーニング」入門』、日経 BP 社、2012